

国の登録有形民俗文化財に登録された鷹栖の装蹄用具及び関連資料や、鷹栖町の近代開拓と農業の歴史文化を今に伝える貴重な資料が数多く展示されています。

畑から水田への転換

開拓当初、寒冷な地域での稲作は適さないとされていました。鷹栖村の山崎千松が明治26年に沢水を利用し種籾の収穫に成功すると米作りをする人が増えていきました。不足する水田用水の確保に向けて「鷹栖村水利調査会」が発足し明治38年に「近文土功組合」が誕生。明治40年に主な灌漑工事を終え、待望の用水が水田を潤していきました。

高地での水田と木製湾管

平地での水田化が進むと10mほど高い場所での米作りを目指し「近文第二土功組合」が誕生。谷を下越するためコンクリート製サイホンが作られましたが、水圧に耐えられず大破し急遽木製湾管で造り直され、翌年末に通水することが出来ました。



木製湾管

オサラッペ川の治水

鷹栖を南北に貫流する「オサラッペ川」は、開拓当初、屈曲蛇行する原始の川で頻繁に氾濫を繰り返していました。さらに水田づくりの加速で鷹栖以外の流域から取り入れられた水田用水は最終的にオサラッペ川に流入するため、洪水の危険度は増すばかりとなりました。この事態に対し、大正8年に中山照重ら地元住民が「鷹栖土功組合」を設立し、民間による治水工事に着手しました。6年3か月に及ぶ大工事の末、全長52kmの蛇行河川は25kmに直線化され水害が減少しました。この治水事業は、地元住民の協力によって成し遂げられた鷹栖の発展を支える歴史的な取り組みとして、今も語り継がれています。



国見の碑



中山照重

馬に支えられた暮らし



明治期から昭和中期にかけて、馬は鷹栖の暮らしを支える欠かせない存在でした。森を切り拓く作業や田畑の整備、冬には物資の運搬など、さまざまな場面で馬の力が活用されていました。当時実際に使われていた馬ソリや馬用プラウなどが展示されており、馬と人が共に歩んだ暮らしの様子を感じ取ることができます。

装蹄師の知恵と技術



令和6年3月21日、「鷹栖の装蹄用具及び関連資料」399点が、北海道で初めて国の登録有形民俗文化財に登録されました。これらの資料は、明治期以降の北海道開拓や農業で重要だった馬の装蹄技術を伝えるものです。当時の装蹄所で使用されていた道具がまとまって収集されており、寒冷地特有の工夫が施された蹄鉄なども含まれています。装蹄師の技術や地域の暮らし、北海道の近代開拓の歴史を知る上で貴重な資料となっています。

暮らしと農業



住宅の再現



当時の日常用品

大正時代の住宅の再現や、当時の冬の寒さをしのぐための道具が展示されています。手作業が主だったときに米作りで使用された「たこ足直播機」などの農具が数多く展示され、当時の米作りや生活の苦勞、そして工夫を感じ取ることができます。

富山から受け継がれた獅子舞文化



松平天狗獅子舞

富山県入善町から伝わった獅子舞で、松平農場の移民山口久八によって鷹栖に伝えられました。



北野神社獅子舞

富山県砺波郡から移住した川辺源三郎によって伝えられた獅子舞で、現在も毎年8月の北野神社祭で奉納されています。

鷹栖発電所

電力事情の悪化を受け、昭和29年、全国でも珍しい低落差の水力発電所が石狩川の取水口近くに建設されました。当時、使用されていた操作盤と屋外にはタービンが展示されています。

英霊の部屋

鷹栖から戦地へ赴き、命を落とした方々の写真や、戦争の悲惨さを伝える遺品が展示されています。また、資料館の隣には戦没者を追悼する「戦没者慰霊の塔」が建てられています。

